

幼児の乳児に対する養護性 nurturance とその測定に関する研究

— 先行研究と今後の方向性 —

(中間報告)

日本女子大学大学院 榎 澤 令 子

Nurturance for the baby of preschool children and study on the measurement

A precedent study and future directionality

Japan Women's University KURUMISAWA, Reiko

要 約

この中間報告では、養護性 nurturance に関する概念の説明、先行研究の紹介を行い、本研究で行う研究とその目的について論じている。これまでの養護性研究の多くは、乳児を養護する大人が中心であったが、本研究では、幼児や児童の乳児に対する養護性を研究する。本研究では、自分より幼い乳児に対して、幼児や小学生がどのような知識をもっているのか、扱う技能をもっているかを調査していく。

【キー・ワード】 養護性, 幼児, 測定方法

Abstract

In this interim report, it explains the concept concerning nurturance, it introduces the previous study, and the research done in the present study and the purpose are discussed. That is targeted to the preschool child and elementary schoolchild though many of people who nurture it were adults. In the present study, what knowledge and skill concerning baby the preschool child and elementary schoolchild have is investigated.

【Key words】 nurturance , preschool child , measuring method

はじめに

養護性 (nurturance 以下「養護性」と記す) は、Fogel, Melson & Mistry (1986) により理論化された nurturance に由来し、共同研究した小嶋 (1989) が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義し日本に提唱したものである。この養護性は、①子どもから大人までが

持ちうるものという生涯発達の視点を含む、②さまざまな対象に対して行いうること、③相手を慈しみ育てる(相手の特徴)という3点での特徴がある。第1の特徴は、養護性は子どもの頃から存在し、成人期に突発的に顕在化するのではなく、生涯を通して発達していくという視点である。第2は、養護性の対象として、子どもが考えられるが、老人や、一時的に有能性を失っている状態にある人、怪我や疾病を負っている人、動植物なども含む(小嶋,1989)という点である。そして、第3の「慈しみ育てる」視点は、「相手」と対面した時、自分の立場と相手の立場が異なることによって生じる気持ちに注目する。子どもを育てる立場の時は、弱い立場である子どもに、今必要なものを援助し、その相手が生きるための刺激を与えなければならず、相手が自分の行為によってどう発達していくかという「育てる視点」までも含んでいるという点である。

このように養護性は広い概念であるため、第1の主体と第2の対象となる相手を定義した上で、「育てる」視점에注目した研究が多くなされている(糊澤, 2009)。特に、主体が親や近い将来親となる人(大学生や妊娠期にある夫婦など)であり、その養護対象が子どもとなる研究(中西・栗津, 1996,1997, 中西, 1999, 小林, 2004 など)が最も多い。これらの研究からさまざまな考察が得られており、大学生の養護性と幼少の頃の被養護体験や養護体験を回顧的に評価し、それらの関連を行った研究(糊澤・福本・岩立, 2009)もあるが、もともと幼少のころから育つ概念であるとしたら、子どもを養護行動をする主体とした研究もさらに行う必要がある。

子どもの養護性に関する先行研究

小嶋・河合(1988)は、年中児(5歳)、小学2年生、小学5年生を対象に、養護性がどのように変化するかを研究しており、年中児では赤ちゃん、妊娠した母への関心、自分の小さい頃の話を書くなどの行動を示すが、小学5年生になるにつれてそのような養護行動は少なくなっていき、逆にペットと遊んだり、自分の洋服や持ち物などを手入れしたりするといった養護行動が、小学5年生にかけて多くなるという結果を示している。特にペットなどの生き物への養護行動は、男児では増えてくるようだ。年齢があがると赤ちゃんに触れる機会が減少することや、友人関係に重きが置かれることといったように、それぞれの年代での関心事が異なってくるのが影響しているだろう。このように、年齢が高まると、子どもの関心が乳児(赤ちゃん)領域以外の領域に向くようになると考察されている。また、きょうだい関係の中での養護性の研究では、上(兄姉)から下(弟妹)へという養護的な行動だけではなく、下(弟妹)から上(兄姉)へという養護的行動も見られるという結果を得ている。これらのことから、養護する(したい)対象が年齢とともに変化することや、きょうだい関係の研究からは、一時的に弱っている人は誰でも対象になるということを示しており、養護性概念を説明している。

さらに、子どもの養護性の中でも、相手を「乳児」に限定した研究もある。Fogel, Melson&Toda, Mistry (1987), Fogel&Melson (1989) は、2歳から6歳までの幼児が母の励ましにより見知らぬ乳児に対して働きかける活動状況を観察した結果、性差は見られず、どの子どもも養護能力を持つことを示した。さらに、弟妹のいる子どものほうが乳児や自分の乳児時代について質問し、乳児が泣い

ていると気がかりな様子を見せた一方、末子やきょうだいのいない子は、下にきょうだいがいる子よりもペットとよく遊んでいた結果が得られている。

また、乳児への関心や知識を就学前児と小学2年生にインタビューした研究(Melson, Fogel&Toda, 1986)では、赤ちゃんの特性を選択させ、述べさせた結果、「赤ちゃんは弱いものだからお母さんや大人が必要だ」ということを幼児も十分理解していることが分かっている。さらに、弟妹のいる小学生のほうが他と比べて、赤ちゃんに関する知識やその扱いの知識が多かったことを示している。これらの研究のように、幼児の乳児に対する知識や養護能力はあり、きょうだいの地位などが差異の要因となっているようだ。

他にも、養護性の性差に関して、研究により結果が異なるが、年齢が上がるにつれ性差が大きくなっているような傾向があるといえる。Fogel&Melson(1989)は、性差について、男子は子どもの世話の責任から注意をそらすように促され、女子はその責任に注意を向けるよう周りから励まされるといった社会の力によって、徐々に養護性の性差が生まれていくと解釈している。Toddler 期には様々な点ですでに性差が存在しているとされるが(Edwards.C.P2002)、この性差が生じ始める時期から周囲の大人が「男の子として」「女の子として」何らかの期待をもった働きかけをしている可能性はあるため、養護性も何らかの性差の影響を受けると考えられる。従って、幼児から児童を含めて、養護性の性差が広がるのかどうかも確認する必要があるだろう。

本研究の目的

以上のような幼児における相手の理解に関する研究としては、他者の内的特性の理解(松永, 1995,2002)や、相手への共感性(渡辺, 瀧口, 1986)などの研究があげられるが、その相手は同い年の仲間関係などからなっている。今回の養護性のように相手が乳児である場合の、幼児の理解や知識についての研究はほとんどない。したがって、乳児に対する知識や扱いの技能・共感性をもっているのか、「育てる」ことを幼児・児童がどうとらえているか、子どもの中に相手を育てようとする意思、つまり、相手の特性をわかった上で相手の必要なものを与えたり差し出したりする思考や行動を、幼児がもっているのかなど、より詳しく調査することをまず第1の目的とする。また、これら養護性と呼べるものの測定方法を開発し、信頼性・妥当性を測りたい。

他に、子どもの養護性形成に関わる要因としては、親の促しや、園での異年齢間交流、小さいことの接触経験、祖父母、近所の人との関わりなどが考えられるし、自分がされた経験を示している部分もあるかもしれない。また、先行研究により、乳児に対する知識やその働きかけについての知識を、幼児がすでに持っていることがわかっているが、さらに接触量(経験量)や性差を影響要因として含めて検討していきたい。

今後の実験計画と方向性

I. 面接調査：幼児がもつ乳児の知識と乳児を扱う技能の知識の調査

幼児（年少，年中，年長クラス）を対象とし，乳児に対する知識と扱う技能の知識を問う。乳児とはどういう特徴をもつか，乳児を育てる人は誰か，その人がどういった世話をするか，世話をしなかったらどうなるかなどを，絵を手がかりにして問い，記録・分析を行う。世話の知識や理解を探りながら，得点化し，乳児に対する養護性の高低をみる。また，可能であれば，子どものフェイスシート（出生順位やきょうだいの有無）や，小嶋・河合（1989）が作成した子どもの養護性項目を改訂したものを，面接対象となった子どもの親に記入してもらったうえで，これらの面接調査の結果との関連を調査する。

II. 質問紙調査：小学生がもつ乳児の知識と乳児を扱う技能の知識の調査

小学生を対象とし，乳児に対する知識と扱う技能の知識を質問紙により調査する。質問紙の検討をしたうえで，小学生の学年群，性別群などに差異があるかなどを検討する。

引用文献

- Fogel,A.D&Melson,G.F&Mistry,J. (1986). Conceptualizing the Determinants of Nurturance, A Reassessment of Sex Differences. In Fogel,A&Melson,G.F(eds), *Origins of nurturance*(pp55-67). Lawrence Erlbaum Associates.
- 小林啓子.(2004). 母親の育児におけるマイナス感情への対処——3歳までの子どもをもつ母親の養護性・育児行動に関連して— 明治学院大学文学研究科 心理学専攻紀要 9号
- 小嶋秀夫・河合優年.(1988). 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和62年度化学研究費補助金・研究成果報告書.
- 小嶋秀夫.(1989). 養護性の発達とその意味：小嶋秀夫（編）. 乳幼児の社会的世界，有斐閣選書. pp.187-204
- 小嶋秀夫.(1991). 親となる過程の理解：我妻 堯・前原澄子（編）.母性の心理・社会学，医学書院. pp.79-111
- 糊澤令子・福本俊・岩立志津夫.(2009).大学生における被養護・養護体験が養護性 nurturance に及ぼす影響. 教育心理学研究. 57, 167-178
- 糊澤令子. (2009) .1985年から現在までの我が国の養護性 nurturance の研究動向. 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, 15, pp201-211,
- Heinicke,C M.(2002). The Transition to parenting / Handbook of parenting 2nd. Vol3 .363-387
- 松永あけみ. (1995) .幼児における他者の内的特性の把握と行動予測能力. 教育心理学研究. 43 204-212
- 松永あけみ. (2002) .幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか. 発達心理学研究.13. 168-177

- 中西由里・栗津幹子.(1996). 養護性に関する一研究—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較—椋山女学園大学研究論集. 27, 9-18
- 中西由里・栗津幹子.(1997). 養護性に関する一研究(2)—幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較—椋山女学園大学研究論集. 28, 81-89
- 中西由里.(1999). 妊婦の「養護性 nurturance」測定の試み—子どもの有無と対子ども感情別の比較—. 母性衛生 . 40 ,72-77
- Melson.G.F,Fogel,A,and Toda.S. (1986) Children's Ideas about Infants and Their Care. *Child Development*, 57,1519-1527.
- Fogel.A,Meldon,G,F,and toda.S,Mistry,J (1987) Young Children's Responses to Unfamiliar Infants:The Effect of Adult Involvement. *International Journal of behavioral development*.10,37-50.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ.(1986) . 幼児の共感と母親の共感との関係. 教育心理学研究,34,324-331

